

< 2018 年 9 月 >

古賀 順子

「ヨーロッパ文化遺産の日」

今年も文化の秋を象徴する「ヨーロッパ文化遺産の日 (Journées Européennes du Patrimoine)」を迎えた。通常は一般公開されない文化財、美術館、省庁、大学や高校、教会、庭園、お城、劇場、観測所、工場、乗り物など、文化や歴史を継承している場所を無料で公開する二日間(9/15・9/16の土日)で、今年で35年になる。フランスが発祥の地で、今日ではヨーロッパ全体に広がり、文化遺産に対する関心を高めることに大きく貢献している行事である。

フランス全体で17,000、パリとイル・ド・フランスだけでも約1,500ヶ所を見学することができる。今年「共有する芸術」をスローガンに掲げ、フランスの歴史、地方の文化や特色を共有することで文化財を大切に守っていくとともに、フランス人としてのアイデンティティを失わず、文化遺産とその精神を若い世代に伝えていくと言う明確な使命を持っている。

2018年は、第一次世界大戦終戦の百周年記念でもある。正も負も含む文化遺産を通して、何を共有し、何を守って、何を後世に残すかを一般市民に広く訴える機会になっていることは確かだ、打ち捨てられた数多くの文化財を自分たちの手で修復しようという動きが広がっている。

その一つが「クラウドファンディング」で、不特定多数の人が資金を出し合って、廃墟と化した文化財を救う方法である。フランス全土には、「歴史的建造物」に指定されているものだけで、43,000を超える。文化財を維持していくのに、国や地方自治体の補助金だけでは到底足りない。広く一般の人々に呼びかけ、小額出資の所有者を募り、文化財を救うクラウドファンディングが各地で実を結び始めている。

次に、今年、特に注目を集めているのが「文化遺産救済宝くじ」である。フランスの「宝くじ」は獲得金額が大きく、一攫千金を夢見る人も大変多い。国が72%の株を保有する「FDJ (Française des Jeux)」が

宝くじ販売を独占しているが、今年初めて「文化遺産救済宝くじ」を発売し、1等1,300万ユーロ(17億5千万円相当)を売り出し、「文化遺産の日」前日9月14日(金)結果を発表した。宝くじの売上は、251の優先リストに登録された文化財修復に使われる。フランスのジャーナリスト、テレビ番組の司会者、人気解説者として活躍しているステファン・ベルヌ(1963年リヨン生まれ)の発案で、効果は大きい。「フランスで一番美しい田舎町」「歴史の隠された秘密」など視聴率の高い人気番組は、日本でも知られている。ごく普通の人々が宝くじで文化遺産救済に貢献するという新たな道が開かれた。これまで修復できなかったお城や文化財が生まれ変わることに繋がる。テレビの効果は、広く一般の人々に文化財の存在を知らせることができる。さらには、その文化財を継承していく次の世代に具体的な希望を与えることができる。教会のステンドグラスを修復できる職人、伝統工芸の技術を持つ職人の数は減少する一方だ。文化財を修復するためには、その技術を継承していかなければならない。次の世代が興味を持てる仕事になる。

私も毎年「文化遺産の日」を楽しみにしている。5区に住んでいるので、5区の歴史を発見したいと思い、今年は「サント・バルブ図書館」の無料ガイドツアーに参加した。ラテン地区である5区の歴史は古く、1460年「コレージュ・ド・サント・バルブ」として、サント・ジュヌヴィエーヴの丘に建てられたのが始まりだ。13世紀から1789年フランス大革命まで、パリの大学で学ぶ者の寮として機能していたのが「コレージュ」である。古くはイグナチウス・ロヨラ(1491-1556)が「コレージュ・ド・サント・バルブ」を出ている。図書館として使用されている現在の建物は新しく、1881-1884年に建て替えられた。鉄材を使った建物は、その後アール・ヌヴォーとして開花する装飾芸術の先駆けを思わせる。5階建てのテラスからの眺めも美しい。家から歩いて3分の「サント・バルブ図書館」。「ヨーロッパ文化遺産の日」がなければ、前を通るだけで訪れることはなかったと思う。